

「論文要旨」

太子教育を担った人々―漢代の太子官属を中心に―

人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

齊藤幸子

古来、太子は国君の後継者候補筆頭として他の皇子とは隔絶したものであり、太子である期間は、皇帝となるための養成準備期間である。本論の目的は、太子教育に関わった人々に視点を置いて、中国皇帝政治の基礎形成期である漢代の太子教育の実態に近づくことである。

第一章では、太子という存在について確認した。漢代では、帝位継承は、「伝子立嫡」を旨とし、太子は皇后所生の嫡長子が原則である。両漢代とも立太子には謁廟の礼が不可欠であり、前漢は高祖廟、後漢は高祖廟と光武帝廟に拝謁することで、王朝創始者に降った天命を血縁によって継承する有資格者と認められた。かくして太子は、太子宮と太子官属が備わり、政治と祭祀に関わり皇帝を輔佐する存在となる。

第二章から第四章までは漢代太子教育について述べた。漢代では、立太子前は、嫡子・諸子に関わらず皇子はみな後宮で養育されたことから、第二章は、後宮での皇子教育を検討した。理想の太子教育論では、皇子誕生時に三母（子師・慈母・保母）が付き、子師は幼儀や基礎的教養を教え、慈母は太子を慈しみ善導し、保母は太子の健康管理を掌るとある。漢代では、三母に相当する者として、女師・阿母・保母がおり、加えて授乳の為の乳母が付けられた。彼女等を統括するのは、皇后あるいは皇太后である。うち、皇子が強い親愛の情を示し、

皇帝即位後も過大な恩寵を与えたのは乳母であり、後漢では、もと乳母が後継者問題に関わり封爵されるケースがしばしばある。

第三章では、本格的な養成期間である立太子後の教育内容をみた。

六芸（礼・楽・射・馭・書・数）と六儀（冠婚葬祭などの礼儀作法）を学ぶほか、漢代では礼容（姿かたち立居振舞）の習得が重視された。

皇帝の外貌や言行は民の畏敬の対象であり、漢代では、皇帝の在り様が自然現象に直接影響すると認識されていたからである。学問面では、最初に『論語』『孝経』を学び、その後に『尚書』ほか『詩』『礼』『春秋』等を学んだ。教官は博士官の学者であるが、他の官職に在る者でも、経書に通じていることで太子への講授を行った。儒学の經典が太子教育に定着したのは元帝期以降である。

一方、知識や教養ではなく、君主としての人格面の修養と政治に臨む判断力や決断力等を養う為には、太子太傅と太子少傅が教導責任者となった。第四章では、太子二傅就任者を網羅的に抽出して分析することにより、その具体的役割を探った。傅の就任条件は大臣クラスに在る者であり、六、七十歳代が多い。武帝期以前と宣帝期以降では就任者のタイプに大きな変化がある。武帝期以前では、学識ではなく、恭敬・謹直・敦厚等の人柄が重視され「長者」的人物が占めた。前漢後半の宣帝期以降では、儒学者が二傅となり太子に直接経書を教えた。しかし、宣帝と次の元帝期では、その人選意図が大きく異なる。宣帝は、儒学が豪族・官吏層に広がりつつある状況を観て、皇帝が望む方向に儒学を主導しようとしており、儒学者を二傅に充てたのは、儒者

との共存を世に示すことにあった。従って、その人選には十分慎重を期し、尚古主義的・教条主義的儒者を避けた。しかし、儒学に傾倒した元帝は、古礼を信奉して理想に奔る儒者を積極的に受け入れ太子二傳に就けた。彼らは太子ひいては皇帝に古礼遵守を説き、漢朝の伝統や祭祀制度の改革を行った。結果、皇帝権威の失墜と帝室の弱体化を世に露呈した。儒教を国家の統治理念に据えた後漢に入ると、二傳の条件は、儒者であり、威厳を備え政治をよく知る者となり、熟年の儒学者が占めた。元帝・成帝期の二傳のような改革的急進性はみられず、彼等はあくまでも皇帝権威を尊び、太子を礼教国家の君主とすべく儒学による政治を説いた。両漢代を通して太子二傳の役割推移を観ると、武帝期以前は太子を見守り育てる後見者的「傳」であり、宣帝期には、学問を教えるという要素が加わることで「師と傳」になり、元帝期以降前漢末は、古礼を信奉して太子を導く「唱導師」と変化し、後漢前期では、儒学を通して君主の在り方を説く「師」になったと言える。太子二傳が太子とその即位後の施政に大きな影響を与えたことは明らかである。しかし、後漢後半は、廢嫡や幼帝擁立が続き太子教育は充分に機能していない。

太子二傳の他には、太子を警護し、その任務遂行を輔佐する為に、大勢の官属が置かれた。第五章では、太子官属就任者を検討した。留意すべきは、宣帝期に近侍の官が新設され、外戚や高官子弟が若年で登用され太子のブレーン及び手足の役割を担ったことであり、彼等は長年近侍して太子との信頼関係を築き、即位後に重職に就いて新帝を

輔佐した。これは、父帝による長期的視野からの後継者対策である。後漢の太子家官制もほぼ同様であるが、後半は太子不在位にも拘わらず、太子家の官職が学生の就職難緩和策として利用され、後漢末期では売官の対象となり皇帝の蓄財の道具と化した。

なお、漢代では、諸侯王国にも中央派遣の傅が置かれており、太子二傅とは異なる側面があるので、それを附論にて述べた。